生命というドラマの共同創造

稲葉俊郎（いなば・としろう）
医師　東京大学医学部付属病院循環器内科助教

医学博士。1979年熊本生まれ。心臓カテーテル治療、先天性心疾患が専門。在宅医療や山岳医療にも従事。西洋医学だけではなく伝統医療、補完代替医療、民間医療も広く修める。2011年の東日本大震災をきっかけに、新しい社会の創発のためにあらゆる分野との対話を始める。思考『いのちを呼びさますもの』（アノニマ・スタジオ）、『ころころするからだ』（春秋社）など。

2000万年前、ユーラシア大陸に地殻変動が起こり、大陸の端が分離すると裂け目に海水が入りこみ、日本海が作られました。その結果、日本列島は大陸から切り離されて独立した島になりました。西日本は時計回り、東日本は反時計回りに回転しはじめ、1500万年前に日本海の拡大が終結を迎えたことで日本列島の原型ができました。日本列島は様々な海流の合流点でもあり、地球の海底プレートの衝突点でもあり、海の流れや地球の地殻変動を一身に受け止めながら、様々な文化を貪欲に学び続ける土地へと育ちました。

海流に乗って日本という島にも人類の祖が定着し、死よりも多い生を創造できたことで人類は生き抜き続け、人口も少しずつ増えました。大自然の中では弱者である人類は集うことで協力し、対話を通して文化や文明を築き、より大きな共同体をつくりはじめました。ただ、人と人との距離が近くなると反発や争いも生まれます。この島にも共通の基準や規範が必要となりましたが、では誰が作るのか、誰にその権利があるのか…、権力や権威の源泉ともなるため新たな争いの種も生み、混沌とした時代の中で、平和な社会が訪れることを誰もが望んでいたのです。

今回の舞台である「壬申の乱」直後の時代は、日本にあらゆる「はじめて」の仕組みが生まれた時期です。「日本」という国のまとまりも、そもそも「日本」という言葉自体がこの時期に生まれました。神話、戸籍、法律、宗教、儀式…、令和の今でも当たり前のように続いている多くの「はじまり」がこの時期に作られました。伊勢神宮の天照大神を信仰することも、伊勢神宮を二十年毎に作り替える式年遷宮も、稲の収穫祭として毎年行われる新嘗祭も、新しい天皇へ代わるときに行われる大嘗祭（天皇即位最初に行われる新嘗祭でもあります）などの儀式は、この時代に作られたものです。

祭式や儀式としていま残っているものは、わたしたちと全く関係のないことでしょうか。儀式はただ古いだけで無意味なものなのでしょうか。古代ギリシアでは、儀式での所作を「ドロメノン（dromenon）」（為されたること）と呼び、「ドラマ（drama）」の語源とされています。「ドラマ」には、舞台での演劇、テレビでのドラマ、劇的な出来事、など多重の意味が含まれていますが、儀式の所作と関係があるようなのです。

もともと、お祭りは共同体の誰もが参加するものでした。誰もが演技者であり同時に観客でもあり、二つの境界は明確に分かれていませんでした。しかも、お祭りは生者だけのものではなく、盆踊りもそうですが死者にまで開かれたものであり、生者と死者とが出会う生命のドラマの再現でもありました。

やがて、専門分化や機能分化の流れの中で「演じるもの」と「見るもの」とが明確に分かれ、祭式や儀式での所作を母体として「芸術」という分野が産まれ、そこからさらに演劇や音楽や絵画などと枝分かれしていったのです。祭式における立場の分離が「芸術」という福音を生みだしましたが、同時に生産者と消費者という異なる二つの立場も生み出し、二つの溝が深まり過ぎると芸術や祭式すらも大量消費社会の濁流の中に飲み込まれてしまいます。その弊害は人知れず私たちを蝕み続け、どういう時代へ舵を切るのか、わたしたちはその分水嶺に立っています。

芸術へとつながる、古代の儀式や祭式の源泉には何があったのでしょうか。そこには、死んでしまったかに見える大自然の生命が、ふたたび蘇生することを願う、強く切実な思いが存在していたのだと思います。冬になると植物は枯れ果てて土に還り、大地も雪に覆い尽くされ、世界は静寂へと向かいます。もし再び春という季節が巡らなければ、人間だけでなくすべての生命は全滅してしまう。生命世界を支える植物の生命循環を再び蘇らせる（黄泉返らせる）ためにも、死が生へと舵を切り、いのちが巡ることを共に祈るためにもわたしたちは儀式という行為を必要としたのです。新嘗祭は、稲の収穫を祝う毎年行われる祭りですが、植物の到来を祝うことは、私たちが今こうして生きていることを確認し合うことでもあり、自然から分け与えられた生命を祝福しあう行為でもありました。人類の生活が狩猟採集から農耕生活へと変わったことで、貧富や貯蓄の差、土地の私物化が生まれ、人類が争い合うきっかけになったとも考えられています。ただ、だからこそ私たちは共に祝い、踊り、唄い、語り、食を囲む儀式をこそ発明したのでしょう。互いの心の溝や、死と生の溝など、あらゆる溝や段差に橋を架けて関係性をつくり直すために、人類は儀式や祭式を生み出し、それは演劇や芸術にまでつながっているのです。

わたしたちの生には、あらゆる死が含まれています。両親、祖父母…ひとつひとつ祖先という縦糸を丁寧に辿っていくだけでも、他にもあらゆる先人たちが横糸の関係として分かちがたく結びつき生命の全体像を織りなしていることが感じられるでしょう。生の一部になっているため、わたしたちの生命のはじまりが分かりにくいだけなのです。いまこうして息をして生きているだけでも、動物や植物などあらゆる生命の死が私たちの生を支え、生の一部となっていることが前提です。そうした出来事はすべて過ぎ去った過去ではなく、いまここに生きるわたしたちにとっては、常に現在の出来事なのです。

死の体験を内面化していくために、儀式や芸術は自分の生命への「水路」の役割を果たします。何かを行なうときに必要とするエネルギーは、適切な水路があることによって、使われずしまっている内奥のエネルギーが泉のようにくみ出されるのです。未知で困難な状況を乗り越えていくためにも、わたしたちは個人にふさわしい儀式や芸術を創造していく必要があるのでしょう。そのことで私たちは自身の最内奥にある未知の水源とも出会います。演劇などの芸術が、「演じるもの」と「見るもの」といった溝が深まり過ぎて、孤独な消費者という迷宮に迷い込まないためにも、劇場のドラマに参加するものは、全員がその場を作り出す共同創造者です。生命の水源から生きる力を汲み出す水路を作り出すことは、過去も未来もすべてが現在の生命に溶け込んだ、生命というドラマの共同創造でもあるのです。